ジェロンディフ
——現在分詞構文との比較——

春　木　仁　孝

1. はじめに

ジェロンディフ（以下 Gf と略記）についても現在分詞構文についても，一般に文法書では，様々なニュアンスを表わすと書かれているが，そのニュアンスにはどのようなものがあるのかについて網羅的に記したものは意外と少ない。さらに，Gf が口語的で現在分詞構文が書き言葉的であるというスタイル上の相違以外に，意味的に両者がどの様に異なっているのかについてある程度まとまった記述となると殆ど皆無に近い。せいぜい，Gf が副詞的で動詞にかかり，現在分詞が形容詞的で最も近い名詞・代名詞にかかるという点と，その帰結として(1)(2)の類の文で，sortir する人物が異なるというおきまりの注意書きがあるのが関の山である。

(1)　J'ai rencontré Dominique sortant du magasin.
(2)　J'ai rencontré Dominique en sortant du magasin.

これとて，学習者に対して，Gf は文の主語に，現在分詞は主語以外のものにかかるような誤った印象を与える恐れがある。せめて(3)，できれば(4)あたりを比較に付け加えるべきであろう。

(3)　Sortant du magasin, j'ai rencontré Dominique.
(4)　En sortant du magasin, j'ai rencontré Dominique.

教科書や文法書において，Gf と現在分詞構文はまとめて扱われることが多いことからも，その意味効果における両者の違いをはっきりさせておく必要がある。

2. ジェロンディフと現在分詞の表す意味効果：記述的整理

2.1. 先ず出発点として，いくつかの記述の分類を示しておく。

『朝倉文法事典』	『プチ・ロワイヤル』	
分詞構文		
1) 時：同時性/先立性	1) 時：同時性/継起性	
2) 条件	2) 原因・理由	
3) 対立	3) 条件・仮定	
4) 譲歩	4) 対立・譲歩	
5) 原因		
ジェロンディフ		《Le Bon usage》
1) 同時性	1) 同時性	1) 時：同時性/同時的状況
2) 原因	2) 様態・手段	2) 原因
3) 手段	3) 原因・理由	3) 条件・仮定
4) 様態	4) 条件・仮定	4) 譲歩・対立
5) 条件	5) 対立・譲歩	
6) 譲歩・対立		

勿論，こういった分類はあくまでも結果的な意味効果に関するものであり，文脈を抜きにしてはそれぞれの例をどこに分類するべきか決め難い場合が多いのは言うまでもない。

2.2. 朝倉文法事典では，Gf と分詞構文の違いについて，(5)(6)の例を引き，これを(7)(8)の相違に比することができると述べている。

(5) Des gamins courent *en criant.*
(6) Des gamins courent, *criant.*
(7) Elle passa *rapidement.*
(8) Elle passa, *rapide.*

つまり，スタイルの違いを除けば，統語上の修飾関係に相違はあるが，(5)(6)のような同時性を表わす文においては結果的にはほぼ同じ意味になるということである。しかし，果たしてそうであろうか。例文(9)(10)を比較してみよう。

(9) Il voyageait *en prenant des photos.*

(10) Il voyageait, *prenant des photos.*

上記の文はそれぞれ，状況によってはほぼ同じように使われるが，実はニュアンスの違いが存在している。その違いを際だたせた訳をするならば，(9)は「彼は写真を撮るために旅行をしていた」，(10)は「彼は旅行をしながら写真を撮った」とでもなるだろう。つまり，(10)においては旅行をするという行為と写真を撮るという行為が，いわばたまたま並行していたことを表わしているだけなのに対して，(9)の文では，EN が存在することにより二つの行為の間により密接な関係が打ち立てられているのである。言い換えれば，voyager という事行が，prendre des photos という事行の中に位置付けられている localisé のである。

2.3. 分詞構文の例のうち，同時性という項目に分類されるものの中には，主動詞の内容を敷衍しているものがある。

(11) Les enfants jouaient dans la cour, *lançant la balle, sautnt à la corde.*

(12) Je la suivis, *montant rapidement l'escalier de bois qui conduisait à la chambre.* (NERVAL, WAGNER & PINCHON (1962) に引用)

この場合，Gf に置き換えると前置であろうと後置であろうと不自然になる。

(13) ? *En lançant la balle et en sautant à la corde*, les enfants jouaient dans la cour.

(14) ? *En montant rapidement l'escalier de bois*, je la suivis.

一方，時間的な関係を表す Gf の中には，主動詞の表わす事行に対して時間的な基準点 repère temporel を表わし，「～する時」「～するに際して」のように訳せて quand で書き換えられるものも多い。

(15) *En rentrant*, passe chez le boulanger et achète six croissants.
「帰りしなにパン屋によって...」 (前置詞活用事典)

(16) Attention *en reculant !* Il y a du monde.
「後ろに退がる際には気を付けて」 (前置詞活用事典)

ただし，この時間的基準を構成する場合，Gf と主節の順番に制約があり，(15)の Gf を後置することはできない。逆に(16)の Gf は前置できないが，一

般的には前置が普通であり，発話によっては(15)と同様，Gf を後ろに置くことができない場合がある。また，Gf を後置できる場合も，実際にはイントネーションの働きを考慮しなければならないということである（FRANCKEL (1989) 参照)。

『前置詞活用事典』によると，この quand で書き換えられる用法については，avoir, pouvoir を用いることはできず，節にしなければならないということである。

(17 a) *Beaucoup de femmes quittent leur emploi *en ayant des enfants.*

(17 b) Beaucoup de femmes quittent leur emploi *quand elles ont des enfants.*

「多くの女性は，子供ができると勤めをやめる」(訳とも『前置詞活用事典』)

しかし，Gf の部分を dès qu'elles ont eu des enfants と解釈すれば，(17 a)の許容度はかなり高くなる。この点から見て，『前置詞活用事典』の訳は非文としての(17 a)の訳としてはふさわしくない。「子供がいると……」とでもするべきであろう。

やはり『前置詞活用事典』によると，être や rester の場合，付帯する動作を Gf で表すことはできない。

(18 a) *Elle restait à la maison *en lisant des livres.*

(18 b) Elle restait à la maison *à lire des livres.*

筆者の調査でも，主動詞が être や rester の時は付帯状況は à + 不定詞の構成を取るのが最も自然であり，Gf を用いるのは難しいようである。ただし，全く不可能という訳ではない。

(19) Elle restait à la maison *en s'exerçant à la flûte.*

これは恐らく，意味内容の乏しい動詞に付帯状況を付けることがそもそもおかしいからで，主動詞を多少とも内容のあるものにしてやると，Gf による構文が成立する。

(20) Il attendait *en lisant le journal.*

2.4. 原則として，Gf には複合形は存在しないとされ，実例も希である。一

方，分詞構文では英語同様，複合形を作ることができる。

(21) *S'étant promenés une bonne heure*, ils s'installèrent dans un café.

この先行性を表わす複合形は，文脈状況によって容易にその意味が理由へと移行する。

(22) *Ayant fini ses devoirs*, il est allé au cinéma.
「宿題を終えて..... →宿題が済んだので.....」

もっとも，複合形の解釈が理由へ移行するには，動詞が完了的・完結的であることが一つの条件のようであり，例えば次の例では複合形が理由を表わすと解釈するのは，よほど特殊な状況がない限り非常に難しい。

(23) *Ayant fait trois pas*, il se retourna et vit que la jeune femme répétait son geste avec d'autres voyageurs.

また，文法書などで問題にされることは少ないが，分詞構文の場合，複合形を用いなくとも次例のように二つの継起的な事行を表わすことが可能である。

(24) Le professeur, *ouvrant le livre*, commença à nous réciter un poème.
「先生は本を開くと，（その本の中の）詩を読み始めた」

ところが(25)のように Gf を用いると，「本を開く」という行為と「詩を読み始める」という行為が，同時に起こる行為と解釈することもでき，先生が開く本と先生が読む詩の間には関係がない状況を表わすという解釈も可能である。

(25) Le professeur, *en ouvrant le livre*, commença à nous réciter un poème.
「先生は本をひらきながら，（たまたま覚えていた）詩を暗唱し始めた/（その本の中の）詩を読み始めた」

Gf の部分を文頭または文末に置いても，本と詩の関係は(24)の場合と同様，曖昧になる。

(26) *En ouvrant le livre*, le professeur commença à nous réciter un poème.

さて、Gf の複合形は確かに希だが，存在しない訳ではない。また，かなり自然な例を作ることもできる。複合形の存在に触れているのは，Bonnard 及び Togeby ぐらいである。

(27) La Tour de France, fondé par H. D. en 1903, couru tous les ans au mois de juillet en une vingtaine d'étapes, *tout en étant devenu* le prétexte de manifestations publicitaires tapageuses, reste la plus importante et la plus célèbre épreuve internationale. (著者の採取例)

(28) Peu nombreux sont les gens qui se rendent au théâtre *en ayant lu* la pièce qui va leur être présentée. (BONNARD が採取した例)

これらの例の Gf を単純形に置き換えると意味が違って来るし，例えば(28)の Gf を，après avoir lu という形にしてもやはりニュアンスが違う。Gf を避けるためには文全体の構造を変えなければならない。いずれにしろ，これらの Gf の複合形は単なる時間的な先行性を表わしているのではなく，結果的な状態を問題にしている。(27)では「今では宣伝の場になってしまっているが……」，(28)では「前もって読んでおいて（つまり作品を知っている状態で）……」のような訳が当てはまるだろう。結果的な状態を表わすのでなければ，既にみたように主動詞の表わす事行を Gf の表わす事行の中に位置付けるということはできない。このことからも予想されるように，Gf の複合形は時間的基準点を表わすことはできない。

2.5. 原因・理由を表わす場合に関しては，何ら制約はないと思われる分詞構文に較べ，Gf の場合はかなり制限があり，特に avoir, être, pouvoir の使用に強い制約が存在する。

(29) * *En étant malade*, il n'a pas pu assister à la réunion.

(30) * *En ayant beaucoup de lettres à répondre*, je ne peux pas lui écrire tout de suite.

(31) * *En étant enfant*, elle ne comprend pas ces choses-là.

(32) * *En ayant déjà tant de choses à faire*, je ne peux pas faire cela en plus.

また，次の例では確かに原因を表わしているが，「病気」→「欠席」などのように二つの事行が推論関係 inférence により結び付けられる場合と較べると，二つの事行の関係付けがあくまでも状況によるものであり，原因・理由と結果という関係を構成する必然性がもともと存在している訳ではない。

(33) *En me voyant dans cet état*, il s'est mis à crier.

朝倉文法事典の Gf の原因の項に挙がっている例も(33)の類のものである。

TOGEBY は，原因 cause は現在分詞構文で表わすと述べている。Le BIDOIS et Le BIDOIS (1971) も Gf が原因を表わせるかどうかを問題にしている (p. 476)。彼らの結論は，明確に因果関係を表わすことができるのは現在分詞構文だが，Gf もまた原因 idée de cause の解釈を許す場合があるとし，例として en forgeant (on devient forgeron) を挙げている。彼らは，この Gf は lorsqu'on forge どだけでなく，du fait qu'on forge, parce qu'on forge とも解釈できるとしている。しかし，この en forgeant は非フランス語話者に取っては，朝倉文法事典の分類のように手段を表わすとするのが最も自然な解釈である。

また GREVISSE で原因を表わす Gf の例として挙げられている次の 2 例は，やはり「～ことによって」という手段の解釈がより適切であると思われる。いずれも comme vous avez fait が付いていることにより，「因果関係」が強められているといえる。(尚，この comme vous avez fait という表現は，FRANCKEL が言うように Gf が一般に前提 préconstruit を表わすという観点から見て興味深い。詳しくは春木（準備中）を参照。)

(34) *En tergiversant comme vous avez fait*, vous avez tout compromis. (§ 801)

(35) *En lanternant comme vous avez fait*, vous nous avez fait perdre toutes nos chances de succès. (§ 1024)

ただし，これらの例も A という事行が契機となって B という事行が発生するという点では，広い意味で因果関係と考えることも可能であり，FRANCKEL などもそのように扱っているところから見て，フランス語で cause, causalité などと言う場合，日本語の「原因」や「因果関係」という言葉が表わす概念よりも広い概念を表わしているようである。そのように考えると，次の条件・仮定もやはり因果関係を表わすことになる。

2.6. 条件・仮定および対立・譲歩に関しては，両者に大きな違いは認められない。

(36) *En roulant / Roulant plus vite*, vous arriverez à l'heure.

(37) *Tout en sachant la vérité*, il ne dit rien.

(38) *Sachant lire l'italien*, il m'a demandé de traduire cette lettre venant d'Italie.

2.7. 最後に，手段を表わす場合を見てみよう。先ず，Gf が手段を表わす点には全く問題がないが，分詞構文で手段を表わすことは難しい。

(39) *En enseignant l'anglais*, il gagne sa vie.
(40) **Enseignant l'anglais*, il gagne sa vie.
(41) On s'instruit *en lisant*.
(42) *On s'instruit *lisant*.

ただし，以下のように分詞構文の部分を長くして情報量を多くすると，現在分詞でも手段を表わすことが可能になる。

(43) *Voyageant par terre et par mer dans le monde entier*, on s'instruit.
(44) *Jouant, dansant, riant*, il réussit à séduire.

ただし，(43) (44) のニュアンスは，手段というよりも「～しているうちに～になる」というように訳せ，現在分詞の表わす事行と主動詞の表わす事行の関係がかなり緩くなり，単なる並行関係に近くなっている。

また以下の二つの例では，Gf の場合は手段のニュアンスが強いが，現在分詞を用いると，泥棒が逃げるときにたまたま窓から逃げたという解釈になる。

(45) ? *Passant par la fenêtre*, le voleur s'est enfui.
(46) Le voleur s'est enfui *en passant par la fenêtre*, (Gf は前置出来ない)

2.8. 以上の観察をまとめて表にすると，概略次のようになる。

	同時性	先行性	手段	原因・理由	条件・仮定	対立・譲歩
ジュロンディフ	○	×	○	△	○	○
現在分詞構文	○	○	×	○	○	○

3. まとめにかえて

以上の観察的記述はもっぱら実用的な観点からのものであり，また紙幅の関係もあり，総ての問題に触れることは出来なかった。

Gf と現在分詞構文の間にどうして本稿で見たような違いが存在するのかという説明は別稿に譲らざるを得ないが，両者の違いは結局，前置詞 EN の有無に由来するのであり，EN の働きを解明することにより説明できると予想される。言うまでもなく，EN はもともと空間的位置付け localisation spaciale

を行なう前置詞であり，そこから時間的・抽象的位置付けへと拡大使用される。例えば il voyageait en France という発話においては，il voyageait という事行に en France が付くことにより，「彼は旅行していた」という事行がフランスという空間に位置付けられ，同時にその空間的位置付けを通して特定の具体的な状況に定位 repérer される。同様に Gf の場合も，例えば例文(9)を見てみると，既に述べたように [lui voyager] という事行が [prendre des photos] という事行の中に位置付けられていて，意味的に「旅行をする」ということは「写真を撮る」ということと密接な関係に置かれている。ただしこれは(9)という具体例についての説明であり，Gf と現在分詞構文の違いをより一般的に説明しなければならないが，それは既に述べたように別稿に譲る。

Gf そのものについての問題としては，例えば，Gf と主節の前後関係は非常に重要な問題であり，Gf の表わす意味や容認可能性に大きな関わりを持っている。例えば FRANCKEL の例を借りると(47)(48)はどちらも可能だが，(49)が自然なのに対して Gf を前置した(50)は不自然な発話になる。

(47) Je suis passé par Dijon *en allant à Besançon.*

(48) *En allant à Besançon,* je suis passé par Dijon.

(49) Je suis allé à Besançon *en passant par Dijon.*

(50) ? *En passant par Dijon,* je suis allé à Besançon. (? は FRANCKEL)

こういったことは，定位操作 opération de repérage という一般言語学的な観点から詳しく分析する必要がある。また，2.3. および 2.5. で，avoir, être, pouvoir などが Gf で使いにくいということを述べたが，実はこの問題は Gf の特定のニュアンスというよりも，Gf のアスペクト解釈という根本的な問題に関わるものである。例(17)で見たように，avoir が Gf として受け入れられるときには状態の解釈ではなく，変化の解釈になるといった問題は，日本語で「ながら」が完了動詞に付くと同時性を表わし（「テレビを見ながら勉強をする」），非完了動詞に付くと対立・譲歩を表わす（「3人の子の母でありながらずっと会社勤めを続けている」）といった現象とも関連付けて対照言語学的にも検討してみる価値がある。

（追記：本稿では，大阪大学仏語仏文学研究発表会（1986年７月５日）における発表を発展させ，理論的な解明も行なう予定であったが，枚数の関係で断念せざるを得ず，専ら実用的な情報提供に目的を絞った。ジェロンディフの主語，複合形、否定に関する問題を含め理論的な説明に関しては，近く別の形でもう一度取り上げる予定なので，そちらを参照して頂きたい。）

（D. 1981　大阪大学助教授）

参考文献

BONNARD, H. (1973) : *Grand Larousse de la langue française, III*, p. 2221-25.

BONNARD, H. (1977) : *Grand Larousse de la langue française, V*, p. 4010-20

BONNARD, H. (1984) : *Code du français courant*. Magnard.

CHEVALIER, J.-Cl. et alii. (1964) : *Grammaire Larousse du français contemporain*. Paris : Larousse.

FRANCKEL, J.-J. (1989) : *Etude de quelques marqueurs aspectuels du français*. Genève : Droz.

GETTRUP, H. (1977) : "Le gérondif, le participe présent et la notion de repère temporel", *Revue romane 12-2*, p. 211-271

GREVISSE, M. (1975) : *Le Bon usage (10e édition)*. Gembloux ; Duculot.

HALMØY, J.-O. (1982) : *Le Gérondif*. Trondheim : Tapir.

Le BIDOIS, G. et R. Le BIDOIS (1971) : *Syntaxe du français moderne*. Paris : Picard.

TOGEBY, K. (1983) : *Grammaire française, III*. Copenhague : Akademisk Forlag.

WAGNER, R.-L. et J. PINCHON (1962) : *Grammaire du français classique et moderne*. Paris : Hachette.

朝倉季雄（1955）：『フランス文法事典』　東京：白水社

春木仁孝（準備中）：「ジェロンディフと事行の位置付（仮題）」

ロベルジェ，クロード他（1983）：『現代フランス前置詞活用事典』　東京：大修館